

# 寸劇 「鴨川の白い鷗」<sup>かもめ</sup>

—江馬細香の物語—<sup>えまさいこう</sup>

細香は、江戸時代後期の女性で、絵を浦上春琴に学び、詩を頼山陽に学びました。号は湘夢（しょうむ）と称します。頼山陽の求婚を江馬の父が断ったといわれています、そして生涯を独身でとおしました。17歳年下の紅蘭とは、美濃出身の同郷であり、京都での住まいも頼山陽宅の川向うにあり、姉のように慕い互いに行き来がありました。

文中 山陽こと頼山陽<sup>らいさんよう</sup>

文中 多保こと江馬細香<sup>えまさいこう</sup>

文中 紅蘭こと梁川紅蘭<sup>やながわこうらん</sup>

## 鴨川の白い鷗<sup>かもめ</sup>

ナレーション

今でも、外国語で詩を書くことは珍しいことです。しかも江戸期で女性が外国語で詩を書いたとすれば・・・それは志あつてのこと、さてどんな女性がどんな詩を書いたのでしょうか。京都の鴨川、丸太町橋のあたりに奇しくも彼女は縁がありました。そこでは歴史学者の頼山陽が住まいし、<sup>おとな</sup>訪いては山陽先生と会いました。その女性の名は江馬多保（えま・たほ）、のちの細香（さいこう）といえます。

山陽

きょうも鴨川は静かにながれておるわ。北を望めば、北山が水墨画のように紫に煙り、その重なりはじつに美しい。まさに山紫水明、この景色なのだ。そして、それをよく理解してくれる多保が愛しい。もうすぐ来ると手紙がきている。大垣からの旅、疲れが出ぬといいが・・・

多保

先生に会いに行くのは、これで七度目。ひょっとすればこれが最後になるかも。だんだん足もこころも弱ってきたと感じるこのごろ。もうわたしは若くありま

せん。先生のことだけ思って過ぎた一生でした。でも悔いはしていません。ただ山陽先生に詩を見ていただける、それだけで幸せで詩を作ったのです、それだけのことなのです。さあ、旅支度もできたので、出かけましょう。

山陽

ああ、鴛がことしもやってきたな。毎年忘れずに来てくれる、そして暖かくなれば知らぬまに消えてしまう。まるで多保のようだ。邪心のない愛が俺を俺らしくしてくれる。深い悩みの海で溺れずにつかまっていられる浮き板のようだ。一日中書き物をしていると、窓を開けて見える鴨川に癒される、いまでも二羽の鴛が戯れている、それがなんとも美しいなあ。

多保

逢坂の関に近づいてきました。大津からしばらく歩くと急に山が迫ってきます。歩いている最中に思い返すのは、初めて先生を知った時のことです。父を大垣の家に訪ねていらしたのは、わたしは二十七歳、先生は三十五歳のときでした。そしてしばらくして父に結婚の申込をしてくださった。でもどういいうわけか許されなかったのです。

山陽

あの鴛は多保のようだ。初めてみたとき、控えめな様子が他の女と違った。たぶん実母を失くしていたからだろう。悲しい目をしていた。はしゃいだり、高笑いをするとところを見たことがない。でも大垣の同人たちに混じって書画をよくしていた。父君の薫陶を受けていたからだ。わたしは、あのとき、妻と別れて独りものだった。そして父君にぜひとも嫁に来てほしいと申し出たが、首を横に振られた。たぶん俺の過去を知られていたのだ。

多保

あの失望の日々のあとも、先生の優しさは変わらなかったわ。普通なら二度と顔もみたくないと離れていくものを。それどころか、お手紙を下さり、わたしも返書し、詩をお見せし、直していただき、そうしてそのことだけが幸せになっていったのです。いや、生きる支えになったのです。

山陽

若かりし頃、妻子を置いて旅に出た。そして引き戻された。弁解しても許されないが、たぎるような学問への情熱があった。一生は長いようで短い。郷里では実家が息子を育ててくれている。前妻は実家へ戻った。そうしてここで私塾を開き、嫁を取った。家内はおとなしく尽くしてくれる。こどもは二人生まれた。こうして所帯を持ち、仕事をして、なぜか虚しい気持ちは逃れようもない。それを満たしてくれるのが多保だ。

多保

あの清らかな鴨川よ。紅蘭女史さまにも久しぶりに会える。わたしは独り身だし、何日逗留しても、先生の奥様も許してくださる。書や詩について色々教わることはなんと幸せなことだろうか。

山陽

多保がくるというので、体調もよくなってきた。ただでさえ心配性な多保だ。ひとの何倍も大きいのだ。早く健康を取り戻し、この仕事を終えねば次へ取り掛かれない。ああ、運命を呪うものか。運命に克たねばならない。

多保

三条大橋が見えてきたわ。川沿いに北へゆけば、先生のお住いがある。もう少しだ。だん王さまに旅の無事をお礼申し上げておかねば。詩のことで、まえに先生はもっと感情を表せと仰った。言葉の選び方を教えてくださった。いや言葉ではない。気持ちや考えを有耶無耶にせず、確かなものとして漢字に込め提示せよと云われた。ああ先生の言葉の海に溺れたい、そう思った。このたびの逗留でもっと教えを乞いたい。

山陽

だんだん多保の書くものは良くなってきている。天地に相對する人の妙を描いておる。

今日は心ならずも多保を叱った。これでよかったのでしょうか、と真顔で尋ねるものだから、我らがそう思わずしてどうなると言った。納得したようだった。何を考えておるのやら、まことに女の心は量りかねる。鴨川にいつしか鴉がくると、多保に思われる。そしていつしか帰っていくのだ。

多保

つい口走ってしまった。先生の顔が怖くなった。最近の先生は気が短いように見える。そしてお顔の色も勝れない。名産の柿と自然薯をみやげにしたが、そう喜んでもおられない。いつも不機嫌でいらっしゃる。わたしが迷惑なのかと思ってしまった。

山陽

女の一生は嫁しては夫に従い、家を守る。世の中の細君はそのように暮らしている。多保は、俺みたいなものに関わったばかりに、独身で妙齢もすぎ、老いの坂を歩いておる。それを悔いておるのか、詩から読み取れないが。思いを抑えず技巧に囚われず詩を書けと励ました。誤りあれば俺が正すと。

多保

逗留できるのも今日限り、明朝には、門下生と一緒に堅田まで見送ってくださるという。珍しいこと、いつも橋詰でお別れしたものを。本当に夕べの酒宴は、

心温まるものだった。詩を吟ずるもの、論じるもの、梁川紅蘭女史も詩を披露されて先生は静かに聞いておられた。会は終わり、片づけをしていたら、雨が降ってきた。ぼんやりと外を見ていたら、先生がやってこられた。「明日は早いからもう休みなさい」と。どうして眠られようか・・・

#### 山陽

明るく振舞っている多保も、ひとりになると寂しい女となる。それがたまらない。俺なのだ、多保の寂しさを埋める存在は。そう思うと、ひとりの男として、責任を感じず。せめて多保の詩や画を後世に残してやりたい。それしか道はないように思われる。詩のなかに俺たちの恋が封じられている。

「雨の夜の窓に細香と別れを語る」

はなれやの灯のもとになどりは尽きず  
かえるさのぬかりみち乾くを待てかし  
岸をへだてて山なみに雲は消えつつ  
となりのたかどののささめきの夜やふけぬらし  
うるうの春まろうどはなおとどまれど  
よべの雨つれなくも花はちりぢり  
ここよりは美濃のくに遠くもあらね  
老いづけばしばしばも相見がたきに

口語訳 土岐善磨



江馬細香の42歳の、文政十一年（1828）の作。

題竹  
 玉立湘江碧 玉立（ぎょくりつ）す 湘江（しょうこう）の碧（みどり）  
 逢人写数枝 人に逢いて 数枝（すうし）を写す  
 流传如有後 流传（るでん）せば 後有（のちあ）るが如し  
 不必恨無児 必ずしも児無きを恨（うら）まず

青々と水をたたえた湘江のほとりにまっすぐ立つ清らかな竹の姿。  
人に会ってその数枝を描いてさしあげた。  
私の描いた画（え）が伝われば、子孫があるのと同じこと。  
子どもがいないのを恨めしく思うことはないわ。

拈蓮子打鴛鴦 蓮子を拈じて鴛鴦を打つ

双浮双浴緑波微 双浮双浴 緑波かすかなり  
不解人間有別離 解せず 人の間に別離のあるを  
戯取蓮心擲池上 戯れに蓮の心を取りて 池上になげうち  
分飛要汝暫相思 分かれて飛び 汝が暫く相思わんことをもとむ

山陽評「真女子語又未經道処慧心香口安能拈破（真の女子の語なり、  
また人の未だかつていわざるところなり、慧心香口にあらざれば、  
いづくんぞ能く拈破せん）」

静夜沈沈著枕遅 静夜 沈沈として 枕に著くこと遅し  
挑燈閑読列媛詞 灯をかかげて 閑かに読む 列媛の詞  
才人薄命何如此 才人の薄命 何ぞ かくの如き  
多半空閨恨外詩 多半は空閨 外を恨むの詩

輓老師玉隣上人 老師玉隣上人ヲ輓ス

飛鴻久不帶書來　　飛鴻　久シク書ヲ帶ビテ來タラズ  
筆硯何知埋積埃　　筆硯　何ゾ知ラン積埃ニ埋ルヲ  
遺墨如今藏在筐　　遺墨　如今　藏シテ筐ニ在リ  
每開一幅一悲哀　　一幅ヲ開ク毎ニ　一悲哀

文を帶び飛來るべき雁なくば　いかで久しく師を思はんや  
知らざりき　積もれるちりに埋る　あるじ在りせぬ筆すずりとや  
今ははた　残りし影や墨の跡　吾が寶にて竹筐にあり  
ひろぐれば一幅ごとに蘇へるせつなき思ひ　よるべなからん

甲戌仲秋遊妙興寺歸路失涼傘戲有此作

翠翠圓陰不可離  
當時聘得自京師  
蓋遮高髻常相伴  
柄託柔掌隨所之  
新霽秋山尋蕈日  
微風春寺醉花時  
一朝何棄吾儂去  
畏景懷君如調飢

日傘は円か 空翠き  
円の内に 吾は在り  
京師より 召し連れ帰る日傘なり  
吾が髪を おほひ護りて 伴にあり  
柔らかな吾が手の内に 柄のあらば  
随ひて 何処なりとも 自在なり  
秋晴れの山に茸を求むる日  
春風の寺の桜に酔ひし時  
伴にありせし傘なれど  
如何なることか 吾すてて  
去り失せるこそ 悲しけれ  
陽の強かれば 君思ふ  
朝餉の前の 飢の如く

(文化十一年秋)

### 暮秋偶題

一歳三分欲盡時 季節は流る秋の末  
菊花稍老柳無糸 盛り過ぎたる菊の花 糸葉消えたる柳あり  
近来嘱婢窓常掩 窓をおほはせ 庭をかくさば  
嫌見庭容次第衰 老いる草木の見ゆるなく 衰ふ生も知らざりき

(文化十一年晚秋)